

STI 感染不安のある若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：合田 友美 (宝塚大学看護学部 准教授)
研究協力者：松高 由佳 (比治山大学現代文化学部 准教授)
田邊 雅章 (大阪府健康医療部保健医療室医療対策課)
新海 のり子 (大阪府健康医療部保健医療室医療対策課)
吉田 英樹 (大阪市保健所)
小向 潤 (大阪市保健所)
櫻井 理恵 (大阪市保健所 感染症対策課)
萬田 和志 (アルバコーポレーション)
中村 圭奈子 (アルバコーポレーション)
古林 敬一 (そねざき古林診療所)
研究代表者：日高 庸晴 (宝塚大学看護学部 教授)

研究要旨

わが国では、2015 年以降、若者層女性における梅毒の流行が確認されており、HIV/STI の知識の普及および検査受検勧奨の推進が喫緊の課題となっている。このような中、HIV/STI の感染不安のある若者男女の特徴を捉えることは、性感染症の流行拡大防止に大いに寄与できると考えた。そこで、エイズ予防啓発のための基礎資料を得ることを目的に、HIV/STI 検査の受検者を対象に実態調査を実施するとともに、その結果をふまえた介入動画を作成し、その効果を測定した。

2017 度～2019 年度に実施した実態調査（質問紙調査）では、性交相手との出会いの経緯や HIV/STI に関する知識・認知、予防に関する行動と認識等の背景要因を探索した。調査対象は、①西日本の A 府または A 市自治体における HIV/STI 検査を 2017 年 10 月～2019 年 9 月に受検した人、および②B 社の HIV/STI 郵送検査を 2017 年 12 月～2018 年 5 月に受検した人、③C クリニックにおける HIV/STI 検査を 2018 年 11 月～2019 年 3 月に受検した人、であり、回収数は①28,586 人、②863 人、③245 人であった。

2019 年度に実施した介入調査では、代表的な性感染症の種類と性感染症の流行の現状、症状、感染予防策（コンドームの使用、受検）、正しい情報へアクセスするためのサイトを紹介した動画を作成し、視聴前後の知識・認識の変化を明らかにするとともに、動画視聴の感想を求めた。調査対象は、C、D クリニックにおける HIV/STI 検査を 2020 年 2 月～3 月に受検した人であり、回収数は 150 人であった。

実態調査より、明らかになった HIV/STI の感染不安を抱く若者男女の特徴は以下 1)～9) で、これに基づいて作成した介入動画の効果は 10)～13) のとおりである。

- 1) HIV/STI 検査について自治体、郵送検査、クリニックの受検者は、いずれも 20 代の占める割合が特に高率であった。
- 2) 男女が性交相手と出会う経緯（6 ヶ月以内）として多いのは、「インターネット」であり、郵送検査の男性では「お金を払った」が高率であった。また、「クラブ」は 20 代の若者の出会いの場であり、他年代と比べ明らかな差を認めた。
- 3) 「（過去 6 か月間に）相手からお金をもらってセックスをしたことがある」人は 10 代～30 代の女性が多く、「（過去 6 か月間に）相手へお金を払ってセックスをしたことがある」のは男性が多く年齢が上がるほど高率であった。

- 4) 毎回コンドームを使用している人は自治体、郵送検査共に女性で特に低率で、男女全体で見るとコンドームを使用しない理由として最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」があった ($p < 0.05$)。
- 5) 「(過去 6 か月間の) コンドームの使用」について、「必ず使った」CSW は 30.4%、非 CSW は 24.3% で、使用目的として「性感染症予防」を使用目的とした CSW は 91.2%、非 CSW は 66.4% で有意差を認めた ($p < 0.05$)。
- 6) 自治体検査において、10 代 61.6%、20 代 60.4% と 6 割以上の女性が「(過去 6 か月間の) 性交相手とのコンドーム使用に関して話題にしている」一方で、約 2 割の女性が「つけて (つけよう) って言えないから仕方ない」と使用をあきらめていた。
- 7) 「(過去 6 か月間の) コンドーム所持率」をみると「すぐに使えるようにいつも身近に持っていた人」の割合が高いのは 10~20 代の男性で、3 割以上が常時携帯していた。一方、20~30 代の女性の所持率は低く、男性に比べ女性の所持率は顕著に低かった ($p < 0.01$)。
- 8) 郵送検査のうち、「いずれかの性感染症に罹患したことがある」男女は全体の 2 割を超え、なかでも女性の罹患率 (36.1%) が高率であった。このうち罹患歴がある性感染症で最も多いのは「クラミジア」(31.7%) で 20 代の 3 割以上に罹患歴があった。なお、クリニック受検者 (CSW) のうち「いずれかの性感染症に罹患したことがある」人は 8 割以上にのぼり、なかでも「クラミジア」(79.3%) が最多であった。
- 9) クリニック受検者へ「HIV または性感染症検査の受検を妨げる理由」として、非 CSW の男性では「診断されるのが怖い」が約 5 割、「時間がない」が約 3 割を占め、10 代 20 代で有意に高率であった ($p < 0.05$)。他方、非 CSW の女性では「経済的な負担」「診断されるのが怖い」がそれぞれ 2 割を占めた。
- 10) パラパラ漫画を用いた 2 分間の介入動画の長さや表示スピードについて、8 割以上は「適当」であると回答し、20 代、30 代男女の 5 割以上より「親しみやすい」「安心できる」などの感想があった。
- 11) 動画の内容が「役に立った」「まあまあ役に立った」と回答した人は、男性、女性、ゲイ・バイセクシュアル男性の全ての群において 8 割を超え、30 代男性と全年代の女性の 5 割以上が「役に立った」と答えた。
- 12) 男女共に「予防のために、コンドームの常時所持が必要である」において認識が変化し、特に 30 代男女において顕著な増加を認めた ($p < 0.001$)。
- 13) 「この 5 年間で、20 代の女性の梅毒感染者数が急増した」「セックスの時、コンドームを使うように相手に働きかける (断る) セリフがイメージできる」の 2 項目は、性別を問わず知識の獲得がすすんだ ($p < 0.005$)。

A. 研究目的

わが国では、2015 年以降、若者層女性における梅毒感染者が急激に増加し 2017 年には、全国 の患者数が 5,000 人を上回っている。そして、女性 は 20 代、男性は 20~40 代にかけて広いピークがあり、感染経路として、男性では異性間性的接触による感染が同性間性的接触による感染を上回り、2018 年まで微増していた同性間性的接触による感染を凌ぐ急増を認め、女性では

異性間性的接触による感染が多くを占めている。このため、以前は MSM の罹患が注目されていた性感染症も、今や男女間の感染拡大防止が喫緊の課題となっている。しかしながら、男女のうち HIV/STI 感染のリスクが高いと考えられる性行動が活発な若者を対象にした研究は未だ十分とはいえない。

そこで、本研究では、HIV/STI 感染リスクが高い若者男女を抽出する一つの方法として、感染

への不安を抱き A 府または A 市自治体、B 社（郵送検査）、C クリニックにおいて HIV/STI 検査を受検した人を対象に実態調査（質問調査）を実施した。そして、MSM (Men who have sex with men) を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である男性」、WSW (Women who have sex with women) を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である女性」と操作的に定義し、10～30 代の男女 (MSM 以外の男性、WSW 以外の女性) を主要ターゲットとして背景要因を分析し、その特徴を明らかにした。

本調査における質問の内容は、基本属性、性交相手との出会いの経緯や HIV/STI の症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識とその実際、HIV/STI 検査の受検歴、性感染症の既往歴等である。

さらに、これらの調査結果を基に、代表的な性感染症の種類と性感染症の流行の現状、症状、感染予防策（コンドームの使用、受検）、正しい情報へアクセスするためのサイトを紹介した介入動画を作成し、その効果と課題を分析した。本介入調査では、動画視聴前後の HIV/STI の症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識を測定するとともに、動画視聴の感想を求めた。

B. 研究方法

1. 調査時期、対象および調査項目

調査 1：自治体検査受検者調査

調査期間は 2017 年 10 月～2019 年 9 月。調査対象は、A 府または A 市自治体が実施している HIV/STI 検査（以下、自治体検査）の受検者 28,586 人である。調査項目は、属性（年齢、性別、性交経験の有無、HIV/STI 検査の受検歴、HIV/STI 感染既往の有無）、金銭授受による性交の有無、性交相手と出会った経緯、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由などである。

調査 2：郵送検査受検者調査

質問紙の配布期間は 2017 年 12 月～2018 年 5 月。調査対象は、B 社が販売している HIV/STI 郵送検査（以下、郵送検査）受検者である。調査

項目は、属性（年齢、性別、居住地、結婚の有無、性交経験の有無、HIV/STI 検査の受検歴、HIV/STI 感染既往の有無）、性交相手と出会った経緯、HIV/STI の知識、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由、効果的だと考える性感染症予防の啓発方法などである。

調査 3：クリニック受検者調査

調査期間は 2018 年 11 月～2019 年 3 月。調査対象は、C クリニックを受診し HIV/STI 検査を受検した 245 人である。調査項目は、属性（年齢、性別、職業、性交経験の有無、HIV/STI 検査の受検歴、HIV/STI 感染既往の有無）、金銭授受による性交の有無、性交相手と出会った経緯、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由、今後かかると思う病気、受検動機や受検を妨げる理由などである。

調査 4：動画視聴による介入調査

調査期間は、2020 年 2 月～3 月。調査対象は、C、D クリニックを受診し HIV/STI 検査を受検した 150 人である。調査項目は、HIV/STI の症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識で 2 分間の動画視聴の前後で回答を求めた。さらに、動画視聴後にのみ、動画視聴の感想を問うた。

なお、動画は 2 分間でパラパラ漫画を用いたもので自身のスマートフォンで視聴できる仕様とした。内容は、主な性感染症の種類、梅毒感染者数の急増、性感染症の症状、症状が出にくい性感染症があること、性感染症にかかると HIV に感染しやすくなること、コンドーム使用の重要性、HIV/STI 検査の受検方法、受検場所に関する情報を提供するとともに、パートナーがコンドームを使わない場合の対応についてストーリー性をもたせて紹介するものである。

2. 分析方法

分析にあたり、集団の偏りを考慮して調査 1、2 では図 1、2、の通り分析対象を抽出した。「性交経験のある」者を限定して、自身の性別、性交相手の性別が「無回答」の者、性別で「その

他」を選択した者を分析対象から除外。「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の男性」を MSM、「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の女性」を WSW と操作的に定義して、MSM、WSW、MSM を除く男性（以下、男性）、WSW を除く女性（以下、女性）をそれぞれ抽出した調査 1 では MSM、WSW、男性、女性の 4 群を対象に、調査 2 ではサンプル数の偏りを考慮して、MSM、男性、女性の 3 群を対象に年代毎の差異を確認し、10 代から 30 代の男女を中心にその特徴を検討した。

調査 3 では、CSW と非 CSW の 2 群に分けて分析。サンプル数の限界を考慮して、対象者が回答した性別を採用し男性、女性を対象に年代毎の差異を確認するとともに、10 代から 30 代を中心にその特徴を検討した。また、金銭授受による性交に着目し、お金を払った人を抽出しその傾向を探った。

調査 4 では、「性交経験のある者」を限定して、自身の「性別」と「性的指向」から、男性（自身の性別が男性で、性的指向が異性の男性）、女性（自身の性別が女性で、性的指向が異性の女性）、ゲイ・バイセクシュアル男性（前述男性、女性、レズビアン、バイセクシュアル女性、アセクシュアル、X ジェンダー以外）と操作的に定義して 3 群を対象に年代毎の差異を確認した。サンプル数の偏りに配慮しながら、性別（3 群）、年代毎の動画視聴の感想の特徴をみた。さらに、HIV/STI の症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識について視聴前後の変化を分析し、介入動画の効果と課題を明らかにした。

分析には、IBM SPSS ver25.0(Windows)を用い、 χ^2 検定および McNemar 検定をおこなった。有意水準は 5%未満とした。

本研究は、宝塚大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

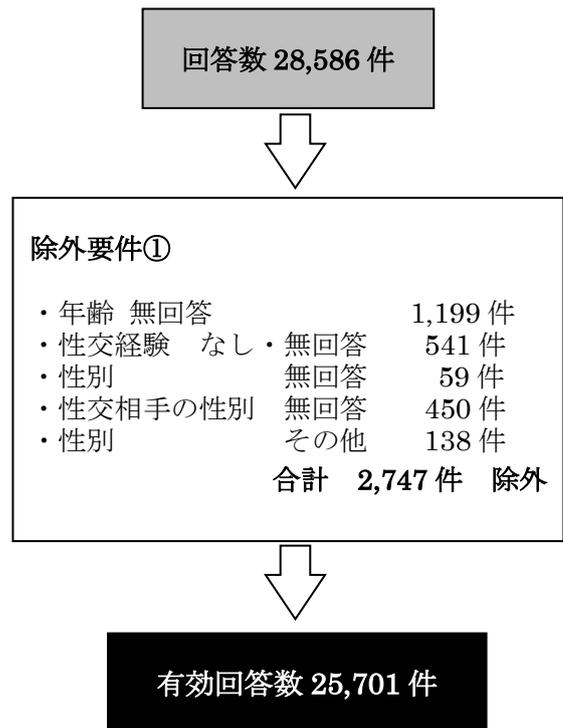


図 1. 自治体検査受検者における分析対象者抽出の過程

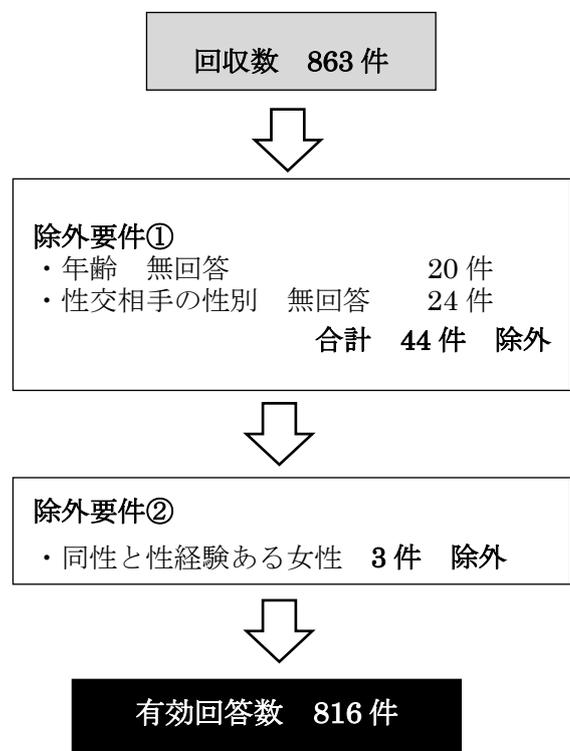


図 2. 郵送検査受検者における分析対象者抽出の過程

C. 研究結果

調査1：自治体検査受検者調査

1. 回答者の分布

本研究の回収数は28,586件で、有効回答数は25,701件(89.9%)であった。回答者の年齢分布をみると、最低年齢14歳、最高年齢87歳(平均年齢35.0歳)で、内訳は10代2.2%、20代38.6%、30代27.9%、40歳以上31.3%であり、10代~30代で全体の約7割を占めた。性別では男性13,283人(51.7%)女性6,573人(25.6%)MSM5,360人(20.9%)WSW485人(1.9%)。女性の受検者の51.3%を20代が占めており、若者女性の受検率の高さが明白となった。一方、男性においても20代(32.4%)、30代(28.9%)がそれぞれ約3割を占めており、若者男性の受検率の高さが示された。

2. 性交相手との出会いの経緯

「性交相手との出会いの経緯」は年代により有意な差($p < 0.05$)を認め、10代~30代男女の「性交相手と出会いの経緯(6ヶ月以内)」で最も多いのは「友人・知人の紹介」であり、「インターネット」と続いた。「友人・知人の紹介」で出会う男女の割合は、10代~20代において約3割であり、40歳以上が2割以下であるのに比して高率であった。他方、10代の男女の「学校」での出会いは30.2%と高く、「インターネット」利用(31.5%)は40歳以上(19.9%)の約1.5倍を占めた。なお、MSMの10~30代は「インターネット」での出会いが7割以上を占め、10代では82.8%と著しく高く、特に異なる傾向を示した。さらに、「クラブ」は20代男女の約1割の出会いの場となっており、他年代と比べ明らかな差を認めた($p < 0.01$)。そして、WSWでは、20代の約4割が「インターネット」を出会いの場としていた。

「(過去6か月間に)相手からお金をもらってセックスをしたことがある」男女は1,168人(17.8%)で、このうち女性は981人と8割以上を占めた。「(過去6か月間に)相手へお金を払ってセックスをしたことがある」男女は7,105人(35.8%)で、このうち男性が大半を占め、

年代が上がるほど有意に高率であった($p < 0.01$)。そして、男性は「(過去6か月間に)相手からお金をもらってセックスをしたことがある」186人に対し、「相手へお金を払ってセックスをしたことがある」7,024人と圧倒的に多く約40倍にのぼった。MSM/WSWでは、「相手へお金を払ってセックスをしたことがある」人が968人で、「相手からお金をもらってセックスをしたことがある」人(468人)の2倍を占めた。

3. HIV検査またはHIV以外の性感染症検査の受検と罹患

「いずれかの性感染症に(過去に)罹患したことがある」男女は全年代で4,335人(21.8%)を占め、なかでも女性の罹患率は29.5%で男性18.1%に比して高率であった。さらに、女性を年代別にみると40歳以上の32.0%が「罹患経験がある」と回答し最も高率であり、10代は20.9%と最も低率であった。

「(過去に)HIV検査を受検したことがある」男女は全年代で9,585人(48.3%)であり10代85人(18.4%)、20代2,754人(35.9%)、30代2,807人(51.9%)で年齢を重ねるほど受検経験のある人の割合率が高くなる傾向にあった。そして、20代までは経験者の割合が未経験者の割合を下回っている一方で、40歳以上は経験者が6割を超えており、年齢を重ねるほど再受検率が高くなる傾向にあった($p < 0.01$)。また、過去の受検時期をみると、「過去6ヶ月以内」が有意に高率であり($p < 0.01$)、中でも10代男女の割合が高く、短期間で受検を繰り返す傾向にあることが示唆された。

今回の受検理由として「性風俗店の利用による感染」を心配している男女の割合は、男性43.1%、女性6.7%、MSM/WSW12.6%で男性は有意に高率であった($p < 0.01$)。

4. 感染予防と背景要因

「毎回コンドームをつけている」男性は28.3%、女性は20.7%、MSM/WSWは25.8%で、男性に比べ女性が低率であった。年代別にみると、男性では10代(37.3%)が最も使用率が高く、女性に

においても同様に10代(25.6%)の使用率が高率であった。

男性がコンドームを使用しない理由で最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」(30.8%)で、10~30代に比して40歳以上の選択率が高率($p < 0.05$)。次いで「妊娠を希望するから使わない」15.5%、「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」13.7%と続いた。一方、女性では、「妊娠を希望するから使わない」と回答した人が20.0%で最も多く、30代において27.9%と有意に高率であった($p < 0.01$)。その他「コンドームを使わない方が一体感がある」17.9%は年代による差はなく、「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」15.4%は10代が21.5%と特に高かった($p < 0.01$)。また、10代61.6%、20代60.4%と6割以上の女性が「(過去6か月間の)性交相手とのコンドーム使用に関する話題にしている」一方で、「つけて(つけよう)って言えないから仕方ない」と回答した女性は16.2%で、男性2.1%に比して有意な差があり、使用をうまく提案できずあきらめている若者女性の存在が明らかとなった。一方、「話題にしていない」のは男性(53.0%)に多く、女性(33.8%)、MSM/WSW(36.9%)の約1.5倍を占めた。さらに、「過去6か月間において性交相手とHIV/STI感染症の予防について話題にしたか」を問うた結果、「話題にした」と回答した人は男性(20.5%)に比して女性(36.5%)に多く、話題にしない20代男性の割合は7割を超え特に高率であった。

「(過去6か月間の)コンドーム所持率」をみると「すぐに使えるようにいつも身近に持っていた人」の割合が最も高いのは20代男性(37.6%)で、次いで10代男性(34.9%)が高率であった。一方、「持っていなかった人」の割合が最も高いのは、20代女性(57.3%)、30代女性(57.1%)であり、男性に比べ女性の所持率は顕著に低かった($p < 0.01$)。

調査2：郵送検査受検者調査

1. 回答者の分布

本研究の回収数は863件で、有効回答数は816

件(94.6%)であった。回答者の年齢分布をみると、最低年齢15歳、最高年齢77歳(平均年齢34.5歳)で20代が40.7%と最も多く、20代~30代で全体の約7割を占めた。MSM100人(12.3%)、男性514人(63.0%)、女性202人(24.8%)で男性が多くを占めた。このうち10代は女性の割合が多いが、20代以降は男性の占める割合が高く、20代は男性が女性の約1.5倍で、30代では3倍以上と男女比が大きく異なっていた($p < 0.01$)。また、居住地は関東(含山梨)が最も多く、男性の22.8%、女性の19.8%が該当した。

婚姻の有無では、男女の69.3%は未婚者で、一般男女を比較すると男性67.5%に比して、女性は73.8%と未婚率が高く、年代毎にみると29歳未満の男女の未婚者の割合は、88.8%と特に高率であった。

2. HIV検査またはHIV以外の性感染症検査の受検と罹患

「(過去に)HIV検査を受検したことがある」男女は10代3人(27.3%)、20代91人(30.8%)、30代94人(47.5%)で30代までは各年代の半数以下であるものの、40代76人(60.8%)、50歳以上49人(56.3%)は半数を超えており、年代により有意な差を認めた($p < 0.01$)。「(過去に)HIV検査を受検したことがある」男女の受検場所の内訳をみると、いずれの年代も「(過去に)郵送検査を受検した」人数が「(過去に)保健所で受検した」人数と「(過去に)病院・クリニック・診療所を受診した」人数の倍以上を占めた。

他方、「(過去に)HIV以外の性感染症検査を受検したことがある」男女は10代2人(18.2%)、20代126人(42.7%)と20代までは各年代の半数を下回った。それに比して、30代100人(50.5%)、40代79人(63.2%)、50歳以上52人(59.8%)と30代以降では5割を超えていた($p < 0.01$)。

そして、「いずれかの性感染症に(過去に)罹患したことがある」男女は全年代で182人(25.4%)を占め、なかでも女性の罹患率は36.1%

と高率であった。さらに、性別と年代別にみると 20 代および 30 代の女性の罹患率が高率で、罹患したことのある性感染症の種類について内訳をみると、「クラミジア」が最も多く 30 代女性の 40.0%、20 代女性の 33.3%に罹患歴があった。「周りの友人や知り合いに HIV/STI に感染している人がいると思うか」を男女に問うた結果、「いる」または「いると思う」と答えた人の割合は全体の約 1 割で、20 代 30 代にやや多い傾向にあった。

3. 性交相手との出会いの経緯

男性の「性交相手と出会ったきっかけ（6 ヶ月以内）」で最も多いのは、「お金を払った」51.0%で、年代別の割合をみると 10 代～30 代よりも 40 代以降の方が高率であった。

一方、女性では、「インターネット」が出会いの機会として最も高率で 25.7%を占め、年代別にみると 10 代と 50 歳以上の女性は特に高く、男性の 3 倍以上を占めた。そして、「職場」21.8%、「友人・知人の紹介」19.3%と続き、「お金をもらった」が 18 名（8.9%）で、「お金をもらった」女性の年代別割合をみると、10 代（11.1%）、20 代（10.3%）が高率であった。なお、「お金を払った」と回答した人はおらず、明らかな性差を認めた。

さらに、「クラブ」と回答した男女は 35 人（4.9%）で 20 代から 30 代が大半を占め、男性よりも女性に高率で合った。

4. 感染予防と背景要因

HIV/STI 感染について相談できる相手が「いない」と回答した男女は 385 人（53.8%）と半数を超えており、誰にも相談できずに受検に至っていた。また、相談できる相手が「いる」と答えた者の内訳をみると、どの年代でも「友人」が最も多かった。

「コンドームを使わない理由として思い浮かぶ言葉」を選択してもらったところ、男性では、「コンドームをつけない方が一体感がある」31.3%であり、「毎回コンドームを使っているので、あてはまらない」23.7%が続いた。一方、

女性では、「妊娠を希望するから使わない」20.3%が最も多く、「コンドームをつけない方が一体感がある」「今まで大丈夫だったから」がそれぞれ 19.8%、「つけようって言えないから、仕方がない」「毎回コンドームを使っているので、あてはまらない」がそれぞれ 19.3%であった。

性感染症に関する知識の取得状況では、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」について、男女ともに正解率が 8 割以上と高く、10 代の男性と 50 歳以上の女性の正答率が低率であった。その一方で、「過去 5 年間に日本で感染報告数が 5 倍以上増加した性感染症は梅毒である」の正解率は男女全体で 53.4%であり、10 代、20 代の男女と 50 歳以上の女性の正答率は 5 割を下回っていた。

調査 3 : クリニック受検者調査

1. 回答者の分布

本研究の有効回答数は 245 件で、性別の内訳は、男性 109 人（44.5%）、女性 136 人（55.5%）であった。さらに、年代毎にみると 10 代 2 人（0.8%）、20 代 84 人（34.3%）、30 代 68 人（27.8%）、40 代 62 人（25.3%）、50 歳以上 29 人（11.8%）で 20 代の占める割合が最も多かった。

有効回答を CSW と非 CSW の 2 群に分けて分析すると、CSW は 96 人（39.2%）、非 CSW は 149 人（60.8%）で非 CSW の占める割合が高かった。CSW の属性をみると、最低年齢 20 歳、最高年齢 59 歳（平均年齢 38.2 歳）で 40 代が 33.3%と最も多く、20 代～30 代で全体の 53.2%を占めた。性別では、男性 3 人（3.1%）女性 93 人（96.9%）でうち既婚者は 16 人（17.2%）であった。また、「過去 3 か月間に提供した性風俗サービスの種類」は「派遣型ファッションヘルス」が 37.5%と最も多く、続いて「ソープランド」30.2%が多かった。一方、非 CSW では、最低年齢 18 歳、最高年齢 65 歳（平均年齢 34.4 歳）で 20 代が 40.9%と最も多く、20 代～30 代で全体の 67.7%を占めた。性別では、男性 106 人（71.1%）女性 43 人（28.9%）で大半が男性、女性の職業はアルバイトやフリーターが多く、男性では社員が 7

割を占めた。

2. HIV 検査または HIV 以外の性感染症検査の受検と罹患

「(これまでに) HIV 検査を受検したことがある」人は、CSW と非 CSW で有意な差を認め ($p < 0.01$)、CSW の方が高率であった。CSW の受検経験あり者は 20 代 73.9%、30 代 96.4%で、年齢により有意差を認めた ($p < 0.01$)。非 CSW でも年代による有意差があり ($p < 0.01$)、10 代 50.0%、20 代 49.2%、30 代 75.0%に受検経験があった。そして、「(これまでに) HIV 感染症 (エイズ) に感染したことがある」CSW は 5 名 (5.7%) であり、非 CSW は 1 名 (1.1%) の 5 倍であった。

一方、「(これまでに) HIV を除く性感染症検査を受検したことがあるか」の問いについても、CSW、非 CSW 間で有意差を認め ($p < 0.01$)、CSW の年齢分布は、20 代 91.3%、30 代 100%で、非 CSW は 10 代 50.0%、20 代 63.9%、30 代 80.0%であり、HIV 検査の受検率を上回っていた。そして、「性感染症の罹患歴」では、「いずれかに感染したことがある」CSW は 85.9%にのぼり、なかでも「クラミジア」(79.3%) が最も多く淋菌感染症 (53.3%) が続いた。これに対し、非 CSW で「いずれかに感染したことがある」と回答したのは 73.9%で、CSW を 10 ポイント以上下回った ($p < 0.05$)。罹患した性感染症の種類では、CSW と同様に「クラミジア」(52.3%) が最も高率で、次いで淋菌感染症 (24.3%) が多かった。最も罹患の多い年代は CSW では 40 代、非 CSW では 30 代であり、異なる傾向を示した。

3. 性交相手とコンドーム使用

「(過去 6 か月間に) セックスをした相手の人数」は、CSW では「10 名以上」が最も多く 67.7%を占めた。一方、非 CSW は「2~3 人」(32.2%) が最も多く、「10 名以上」と回答した人は 26.2%に留まっていた。また、「(過去 6 か月に) セックスした相手」として CSW では、「(生風俗店の) 客」が 87.3%と最も多く、「恋人や配偶者など特定の相手」は 50.6%と半数であった。これに対し非 CSW は「恋人や配偶者など特定の

相手」が 57.9%と半数を超えて最も多く、「友人やセフレ」が 40%を占めており、男性の 32.7%は、「(自分が) お金を払った相手」と回答していた。なお、CSW が「性風俗サービスを提供した相手の 95.8%は「母国語が日本語」であり、「(過去 3 か月間に) 性風俗サービスを提供した相手の延べ人数」は、「101 人以上」(24.0%) が最多であった。

「(過去 6 か月間の) コンドームの使用」について、「必ず使った」と回答した非 CSW は 24.3%で「性感染症予防」のための使用 (避妊と性感染症予防の両方を目的とした人を含む) は 72.9%であった。これに比して「必ず使った」CSW は 30.4%と高率で、「性感染症予防」のための使用 (避妊と性感染症予防の両方を目的とした人を含む) は 91.2%とかなり高率であった。一方で、「全く使わなかった」と回答したのは、非 CSW 12.9%、CSW が 13.9%と大差はなかった。そこで、CSW の「(過去 3 か月間の) 性風俗サービス提供時のコンドーム使用」について問うた結果、51.0%が「自分が準備したコンドームを使用」し、45.8%が「ホテルに備え付けのコンドームを使用」しており、CSW が「使用しなかった理由」で最も多いのは、「コンドームを使用する必要のないサービスだから」(54.2%) で、「コンドームを使わない理由」として、「仕事だから」(47.3%) と回答する人が約半数を占めた。これに対し、非 CSW で最も多い回答では「コンドームをつけない方が気持ちいいから」(46.2%) が約半数であり、次いで、「コンドームが手元になかったから」が 25.5%「一体感がほしかったから」(22.6%) と続いた。

4. 感染予防と背景要因

「今後かかると思う病気」について問うた結果、「がん」と「HIV 以外の性感染症」の 2 項目で CSW と非 CSW の 2 群間で有意差を認めた ($p < 0.05$)。また、年代による差はなく回答率が高い順にみると、CSW では「インフルエンザ」(61.5%) の次に「HIV 以外の性感染症」(47.9%) と続き、「HIV 感染症」は 10.4%であった。これに比して、非 CSW では「がん」が

(57.0%) が最も高率で、「インフルエンザ」(55.7%) と続き、「HIV 以外の性感染症」は 26.2%、「HIV 感染症」は 11.4%に留まっていた。

「HIV または性感染症検査を受けようと思うとき」についてトップ 3 をみると、非 CSW の男性では、「体の不調を感じた時」(50.9%)、「パートナーが HIV または性感染症になったとき」(43.4%)、「HIV または性感染症についてのニュースや記事を読んだとき」(22.6%) があがったが、非 CSW の女性では、「定期的」(55.8%)、「体の不調を感じたとき」(39.5%)、「人生の節目」(30.2%) と、異なる傾向を示した。さらに CSW では、「定期的」が 74.0%と多数を占め、「パートナーが HIV または性感染症になったとき」(22.9%) は年代によって有意な差を認め ($p < 0.05$)、「体の不調を感じた時」(21.9%) が約 2 割いた。このように CSW と非 CSW では、受検動機が異なっていた。

なお、「HIV または性感染症について心配なことがあるときの対応」で最も多いのは、非 CSW、CSW 共に「病院を受診する」であり、「病気についてインターネットで調べる」が続いた。一方で、「HIV または性感染症検査を受けるのを妨げる理由として最も多いのは、CSW で「経済的な負担がある」25.0%で 30 代以降に有意に高率であり ($p < 0.05$)、次いで、「診断されるのが怖い」19.8%があった。そして、非 CSW の男性では、「診断されるのが怖い」45.3%が特に高率であり、「時間がない」28.3%も約 3 割を占め、10 代 20 代で有意に高率であった ($p < 0.05$)。他方、非 CSW の女性では、「経済的な負担がある」「診断されるのが怖い」がそれぞれ 20.9%を占めた。

性感染症に関する知識の取得状況では、CSW と非 CSW の正答率で有意な差 ($p < 0.01$) を認めた項目は「HIV 検査には、その日のうちに結果が分かるものがある」の 1 問のみで、CSW の方が、正答率が低率であった。

調査 4 : 動画視聴による介入調査

1. 回答者の分布

本研究の回収数は 150 件で、このうち、レズビアン、バイセクシュアル女性、アセクシュア

ル、Xジェンダーを除く 141 件を分析対象とした。年齢分布をみると、最低年齢 20 歳、最高年齢 66 歳 (平均年齢 38.4 歳) であり、その内訳は 20 代 34 人 (24.1%)、30 代 43 人 (30.5%) で、40 歳以上が 64 人 (45.4%) を占め、20、30 代が全体の約半数であった。

性別の内訳は、男性 39 人 (27.7%)、女性 78 人 (55.3%)、ゲイ・バイセクシュアル男性 24 人 (17.0%) で、女性の 23.1%を 20 代、25.6%を 30 代が占めており、男性においても同様に、20 代 (23.1%)、30 代 (30.8%) が全年齢の約半数を占めていた。

職業の内訳として、男性の約 7 割が会社員で 30 代では 9 割を超えるのに比して、女性では性風俗店勤務が 7 割を超え、20 代女性の約 4 割を学生が占めていた。

2. HIV 検査または HIV 以外の性感染症検査の受検と罹患

HIV 検査の受検歴をみると、男女共に 7 割を超えており、なかでも 30 代女性が 9 割と高率で、男性の 1 割に罹患歴があった。

他方、HIV を除く STI 検査受検歴は男性 76.9%、女性 91.0%と女性が高く、男女共に 30 代が特に高率で男性 91.7%、女性 100%であった。そこで罹患歴をみると、男女共に「クラミジア」が最も多く、女性の罹患率 (81.7%) が突出しており、20 代 (60.0%)、30 代 (90.0%) が多数を占めた。また、「梅毒」では男性 (10.0%) に対し女性 (19.7%) の罹患率が 2 倍を占めた。

3. 感染予防行動と背景要因

(過去 6 か月の)コンドームの使用状況をみると、男性、女性共に 21.1%が「必ず使った」と回答しており、特に女性では年齢による差が大きく、30 代 (33.3%) では「必ず使った」人の割合が有意に高かった ($p < 0.05$)。これに対し、20 代男性の 33.3%は「使わないことが多かった」、30 代女性の 22.2%は「全く使用しなかった」と回答していた。なお、コンドームを使用した目的について「性感染症予防のため」「避妊と感染症予防のため」のいずれかに回答した人は、男

女共に 8 割以上にのぼり、コンドームの使用による感染予防行動は 2 極化していた。

4. 動画視聴の感想

動画の表示速度および長さについて「適当」と回答した人は、男女共に 8 割を超えた。動画の印象は性別、年代による有意差がなく、男性では 20 代の 55.6%が「安心できる」、30 代の 58.3%が「親しみやすい」と回答し、20 代 (55.6%)、30 代 (41.7%)が「若者向け」と感じていた。一方、女性では 20 代、30 代において 6 割以上が「親しみやすい」と感じ、30 代の 45.0%が「安心できる」と回答しており、20 代の 33.3%が「興味深い」「若者向け」と答えた。また、ゲイ・バイセクシュアル男性では 30 代において、5 割以上が「親しみやすい」「安心できる」「信頼できる」「若者向け」と回答していた。

動画の内容が「役に立った」「まあまあ役に立った」と回答した人は、男性、女性、ゲイ・バイセクシュアル男性の全ての群で 8 割を超え、30 代男性と女性の全年代において 5 割以上が「役に立った」「まあまあ役に立った」と答えた。また、30 代の男性、全年代の女性、10 代、40 歳以上のゲイ・バイセクシュアル男性において約 5 割が、動画を「もう一度見たい」と「思う」「多少思う」と回答していた。

5. 動画視聴による認識/知識の変化

HIV を含む性感染症の予防についての考えを問うた結果、男女共に「予防のために、コンドームの常時所持が必要である」において、有意に認識が変化した ($p < 0.01$)。なかでも、20 代男性 (33.3%→44.4%)、20 代女性 (38.9%→50.0%) に対し、30 代男性 (8.3%→66.7%)、30 代女性 (40.0%→80.0%) と、30 代男女においてコンドームの常時所持の必要性を認識した人が顕著に増加した。

「この 5 年間で、20 代の女性の梅毒感染者数が急増した」「セックスの時、コンドームを使うように相手に働きかける (断る) セリフがイメージできる」の 2 つの項目は性別を問わず、知識の獲得が有意に進んだ ($p < 0.005$)。そして、

「性感染症にかかっていると HIV に感染しやすい」「HIV の検査は、採血のみでできる」の 2 項目は、女性において有意に正答者が増えた ($p < 0.05$)。さらに、「性感染症には、感染すると不妊症になりやすくなるものがある」はゲイ・バイセクシュアル男性のみ「分からない」と回答する人が有意に減少した ($p < 0.001$)。

D. 考察

本研究は、HIV/STI の知識の普及および検査受検勧奨の推進を図るため、まず、その実態を探るべく A 府または A 市自治体、B 社、C クリニックにおいて HIV/STI 検査を受検した人を対象に質問調査を実施した。そして、この結果を基に訴求性を高める工夫について考察し、パラパラ漫画を用いた介入動画を作成して、その効果評価をおこなったものである。

受検者の属性分布を年齢別にみると、受検場所によらず、10~30 代が全体の約 7 割を占めており、一般若者男女の HIV/STI 感染リスクの高さ (感染不安の実在) から若者に馴染みやすいパラパラ漫画を用いた。その結果、視聴の感想には、20 代、30 代の半数以上から「親しみやすい」「安心できる」との回答を得た。さらに、男女共に性感染症の動向として「梅毒感染者数の急増」に関する知識の獲得がすすみ、「HIV を含む性感染症の予防のためにはコンドームの常時所持が必要である」という認識の変化を認めた。また、近年、性交相手との出会いの方法は多様化し、(自らアクセスすれば) 新しい出会いの機会を容易に得ることができる仕組みが広がっている。この社会の変化に遅れぬよう、健康を守るための規範意識や性感染症に対する感染予防行動を高めるための啓蒙が急がれる。そこで、これら若者男女の出会いの経緯をふまえ「インターネット」や「SNS」を活用した介入が不可欠かつ有効である。ただし、インターネット上には多くの情報が氾濫しているため、正しい情報に確実にアクセスできるシステムの構築が必須である。HIV/STI 検査受験を妨げる理由について、「時間がない」「経済的な負担がある」「診断されるのが怖い」と感じる人への配慮として、動

画の最後に『HIV 検査・相談マップ』へアクセスできるような工夫を講じた。これによって、それぞれのニーズに合わせてより詳細な知識と受検方法、治療法、支援などの情報提供に繋がることを期待したい。

E. 結論

若者男女の出会いの多様化が進んでおり、HIV/STI の知識の偏りから、知識の普及および検査受検勧奨のための効果的な情報発信が喫緊の課題であることを再確認した。そして、若者男女の出会いのきっかけを活かし「インターネット」や「SNS」を活用して、プライバシーを確保しつつ受検時等のタイミングを掴んで不足している情報にアクセスできる仕組みを構築することができたと考える。

F. 研究発表

1. 論文発表

本テーマに関する発表論文はありません。

2. 学会発表

(国内)

1. 合田友美, 松高由佳, 萬田和志, 中村圭奈子, 日高庸晴: HIV/STI 郵送検査を受検する若者男女の性感染症に対する認識と予防行動の特徴: 第 37 回日本思春期学会総会・学術集会シンポジウム (2)「性教育の未来を語る」, 2018, 東京.
2. 合田友美, 日高庸晴: クリニックで性感染症検査を受検した男女の性感染症に関する認識—CSW と非 CSW の違いに着目して—: 第 38 回日本思春期学会学術集会, 2019, 東京.
3. Tomomi Goda, Yasuharu Hikada: Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan: The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2020, Osaka.

G. 引用

なし